

エミリス・ダルシンス作曲 『メランコリックなワルツ』

Emīls Dārziņš : Valse Mélancolique

本日の公演プログラムで最後にお聴きいただいた作品は、イヴァノフスと同じラトビアの作曲家であり、指揮者、音楽評論家でもあったダルシンス(1875-1910)の現存する唯一の管弦楽作品、公演プログラムとはちょっと違った雰囲気、歌心に溢れた美しい作品、『メランコリックなワルツ』である。バルト三国の音楽を演奏する際はアンコールに…と選曲委員の1人が以前よりあたためていたこの作品、ネーメ・ヤルヴィが手兵を率いてラトビアを訪れた際のアンコールピースとして用意したとか。

エミリス・ダルシンス音楽学校という、学校名にその名が残る彼は、幼い頃に両親から音楽を教わった。3歳でほぼ視力を失った彼は音楽にのめりこみ、また太陽光アレルギーと診断され8歳頃まで暗い中での生活を送った。その後、16歳になるとリガで音楽の勉強を続け、最初の歌曲を作曲する。この作品はヴィートルスに高く評価された。

1897年、モスクワ音楽院に入学するも病気により退学、後にサンクト・ペテルブルク音楽院のオルガン・クラスに入学。経済的理由により、学業を終えられぬまま1901年の春にはリガに戻って音楽評論家、教師、合唱指揮者、ピアニストとして働き始めた。この頃の手紙には、「祖国と、祖国の芸術のために働く — それが私のモットーだ」と書かれている。

1903年に結婚するも、貧困と彼自身のアルコール依存で幸せなものではなかった。アルコール依存の原因は、他のラトビア人音楽家からの敵意ある態度だったと考えられている。もしかしたら妬みなどもあったのだろうか。強い批判にたい、すべての管弦楽作品を破棄してしまった。彼の生涯は、1910年夏に列車に身を投じて終わりを告げた。

本日演奏した『メランコリックなワルツ』は、彼の死後に復元された唯一の管弦楽作品である。

オーケストラ 《エクセルシス》